# 『紅楼夢』における「無用の用」

## ――第二十二回所引『莊子』列禦寇篇及び人間世篇を中心に――

王　　竹

### は じ め に

『紅楼夢』の思想研究[1]には，その創作に寄り添いながら書かれた評閲，すなわち脂評[2]が極めて重要であると考え，これまで『紅楼夢』思想研究の必要性を問題提起し，『紅楼夢』研究における脂評の位置づけに言及し，第二十一回の脂評に指摘された宝玉の「三大病」と莊子との関係や，第二十一回で宝玉が『莊子』胠篋篇を書き続けることの意味を分析し，『紅楼夢』本文に隠された莊子の世界を脂評に基づいて解明することを試みてきた[3]。

『紅楼夢』中，『莊子』を直接引用する場面，引用はしないが『莊子』の世界を彷彿とさせる場面が多々見られるのは言うまでもない。同時に，脂評にも『莊子』を典故とするものが少なくない。本稿で取り上げる第二十二回の場面もそのひとつで，そこには作者曹雪芹が『莊子』を意識して「列禦寇篇」及び「人間世篇」を直接引用する場面があるのみならず，『莊子』を典拠とする脂評も存在する。作品と脂評とを併せて分析することによって，主人公宝玉の考え方に「無用の用」がどのように反映されているのかを解明するのが本稿のねらいである。

キーワード：『紅楼夢』，脂評，『莊子』，無用の用，価値観

また，第二十二回の脂評を読み解くことによって，宝玉だけではなく多くの登場人物の人生にどのように「無用の用」が色濃く映し出されているかを知れば，曹雪芹の描く多くの人物像が『荘子』の思想を具現化したものであることも明らかになるだろう。

さらには，第二十二回に留まらず，『紅楼夢』全編にわたって「無用の用」がどのように反映されているかを脂評に基づいて分析し，『紅楼夢』に点在する荘子の世界を明らかにしたい。登場人物の運命を「無用の用」によって設定し展開させた作者の意図を解明することで，小説に媒介に儒家的価値観を崩壊させようとした作者の意図も解明されるからである。

## 第一節　第二十二回所引『荘子』列禦寇篇及び人間世篇

拙稿「宝玉の「三大病」と荘子――『紅楼夢』第二十一回の脂評を基に」では，『荘子』胠篋篇を書き続ける場面（第二十一回）で，宝玉が荘子のいう絶対的自由を一貫して求め続けていたこと，日々の生活の中で宝玉が希求する生き方が荘子の理想に合致していたことを，脂評を通して明らかにした。その脂評が第二十一回ではなく，第二十二回にあったことはすでに拙稿で指摘したが，それは次の第二十二回にも『荘子』が引用される場面があり，第二十一回と第二十二回とは一体であることを察知した脂硯斎が一括して書いたからだと考えられる。そこで，本稿では，第二十二回所引の『荘子』列禦寇篇と人間世篇の場面を分析して，『荘子』の「無用の用」について考察する。

一族で芝居を観た後で，宝玉の従妹史湘雲がひとりの女形の容姿が黛玉にそっくりだと口走った。それを聞いた宝玉は，史湘雲の発言はあまりにも軽率で，黛玉を怒らせるのではないかと心配になった。そこで，宝玉は史湘雲に目配せをして黙らせようとした。ところが，史湘雲は宝玉の黛玉に対する配慮に腹を立てた。一方，黛玉は，女形などに譬えられたことに

屈辱と，自分と史湘雲との問題に宝玉が介入したことに怒りを覚えた。

> 宝玉はそれを聞いて，さきほど史湘雲と交わした内緒話を，黛玉が聞いていたのだと合点がいった。よくよく考えてみると，彼女ら二人を怒らせまいと，間に立って調停するはずだったのが，思いもかけず両方から叱責を受けることになってしまった。ちょうど先日読んだ『南華経』のなかの文句にぴったり合う「器用な者は苦労しがちで，知恵者はかえって心配性，それと反対に無能者はほかに求めたりしないから，粗食して遊び暮らし，まるで波に漂う小舟のようだ」とか「山の木は自らを寇(そこな)い，源の泉は自ら盗む」の文句を思いおこすと，いよいよつまらなくなった。「今この二人とすら仲よくやっていけないとなると，将来どういうことになるのだ……」そう考えると，もう弁解する気も起こらず，そのまま身をひるがえして自分の部屋へもどっていく[4]。
>
> 宝玉见说，方才与湘云私谈，他也听见了。细想自己原为他二人，怕生隙恼，方在中调和，不想并未调和成功，反已落了两处的贬谤。正合着前日所看《南华经》上，有“巧者劳而智者忧，无能者无所求，饱食而遨游，泛若不系之舟”，又曰“山木自寇，源泉自盗”等语．因此越想越无趣。再细想来，目下不过这两个人，尚未应酬妥协，将来犹欲为何？想到其间，也无庸分辩回答，自己转身回房来[5]。

思えば二人を怒らせないために調停するつもりが，図らずも両者から叱責をこうむるはめになった。さてどうしたものだろうかと思案していると，ふと，先日読んだ『荘子』列禦寇篇と人間世篇の二文を思い出したというのである。

「器用な者は苦労しがちで，知恵者はかえって心配性，それと反対に無

能者はほかに求めたりしないから，粗食して遊び暮らし，まるで波に漂う小舟のようだ（巧者労而智者忧，无能者无所求，饱食而遨游，泛若不系之舟）」は，『荘子』列禦寇篇の一文[6]，もうひとつ，「山の木は自らを寇い，源の泉は自ら盗む（山木自寇，源泉自盗）」は，『荘子』人間世篇を典拠とする一文である。

前者は器用な人は体を疲れさせ，物知りは心を苦しめるが，無能者はこれといって求める当てもなく，食べては気ままに遊んでいる，無能者は気楽だというもの。後者は山の木は役に立つから伐採される，美味しい泉は美味しいから人に盗まれる，有能者は苦しむという意である。いずれも有用より無用こそ真の益があるという。

では，ここに『荘子』を引用したことは，『紅楼夢』にとってどのような意味を持つのだろうか。もちろん，作者がただ単に小説の筋にあわせて思いつきで引用したものではない。ましてや，作者が『荘子』に精通していることをひけらかすためなどではない。ここには入念に計算しつくされた作者の意図がある。

まず，列禦寇篇についていえば，「器用な者（巧者）」とは行動力があって何事も効率的に実行し成果を出すことができる人であり，その対局にあるのが「拙者」[7]，怠け者で実行力に乏しく，何をやるにもうまくできず，しばしば人に迷惑をかける人である。両者は同じ社会に生きているため，例えば両者がひとつの仕事をするとしたら，「無能者」は二割しかできないので「巧者」はその残りの八割をせざるを得ない。「巧者」の仕事量は「拙者」の何倍もある上に，重責を負うのはいつも「巧者」の方だ。そのため，「巧者」は肉体的にも精神的にも苦労することになる（巧者労）。反対に，「無能者」は自ら求めることもなければ，人から求められることもない。そのため，人の目を気にすることもなく，プレシャーもなくのんびりすることができる。何よりも重要なのは，「無能者」は他人から嫉妬さ

れることがないため，決して災難を招くこともないということであろう。

また，頭脳明晰な「知恵者（知者）」は，国家や社会に役立とうとして，もてる知恵を駆使しようと躍起になる。その結果，時に嫉妬され中傷されて罵声を浴びせられ，精神的な苦痛に耐えなければならない（智者忧）。ところが，「愚者」[8]は決して目立つことなく，そのため攻撃の対象になることもなく，我が身を守って自由気ままに生きることができる。これこそ「愚者の幸せ」というものである。

では，宝玉は「巧者」「知者」だろうか，それとも「拙者」「無能者」「愚者」だろうか。『紅楼夢』全編を通してみると，宝玉は「巧者」と「拙者」，「知者」と「無能者」「愚者」の間を徘徊している人物だと思われる。博学で見識があり，詩詞文章に巧みであるにもかかわらず，科挙の道を嫌い，出世を考えるだけでも気分が悪くなるという男で，しばしば「狂」や「愚」で形容される[9]。黛玉と史湘雲の仲直りをさせようとしたところが却って二人を怒らせ，どちらからも非難されるはめになってがっかりした宝玉は，自分のことを「巧者」・「知者」に喩え，「拙者」「無能者」「愚者」であればこのように思い煩うこともないだろう，有能より無能のほうがいいのだと慨嘆し，「汎として不繋の舟の若く（泛若不系之舟）」生きるなら心悩むこともないだろう，これこそ理想の人生であろうと考えたのである。

このように，曹雪芹はこの列禦寇篇の一文を引用して，「有能より無能の方がよい」という宝玉の心の声を代弁し，有能と無能の間を彷徨う宝玉の人物像を描き出すことに成功したのである。

次に，人間世篇についてみれば，まず，第二十二回に書かれた『荘子』の一文は，『荘子』の原文と同じではないことがわかる[10]。

> 山木は自ら寇し，膏火は自ら煎く。桂は食らうべきが故に伐られ，漆は用うべきが故に割かる。人は皆有用の用を知るも，無用の用を知る

ことなきなり。

山木自寇也，膏火自煎也，桂可食故伐之，漆可用故割之，人皆知有用之用，而莫知无用之用也[11]。

これが『荘子』人間世篇の原文で，「山の木は役に立つから伐採され，灯火油脂は役に立つから身を焦がしている。肉桂は食べられるために切り取られ，漆は使われるために切り裂かれる。世の人間もまた有用であれば酷使されて若死にするが，無用であれば自由自在に生きて天寿を全うすることができる」と，いわゆる「無用の用」の価値を宣言する一文である。

しかし，『紅楼夢』の引く人間世篇は，「山の木は自らを寇い，源の泉は自ら盗む（山木自寇，源泉自盗）」とあり，『荘子』人間世篇とは同じではない。これについて，脂評は次のようにいう。

源泉はうまいので，人は争って取りに行く。それは泉が自ら涸れることを招いているようなもの。「山木は自ら寇す」の意味と同じく，人知がその身に害をもたらす意を託している。

源泉味甘，然后人争取之，自寻干涸也，亦如山木，意皆寓人智能聡明多知之害也[12]。

「源泉はうまいので，……泉が自ら涸れることを招いている」との脂評は，容易に「甘井先竭」（山木篇）を想起させる。すなわち，「源泉自盗」は作者が「直木は先ず伐られ，甘井は先ず竭く（直木先伐，甘井先竭）」の意を取り，独創的に工夫した一句だと考えられる。ともあれ，「山木自寇，源泉自盗」と「山木自寇，膏火自煎」とは，その意において同じで，知恵ある者はその知恵のために害を招く，才ある者はその才のために身を滅ぼすというのである。

史湘雲と黛玉の誤解を招き，二人から非難されて悔しい思いをしたのは，彼女たちに対する細かな思いやりのせいだと気づいた宝玉は，「『山の木は自らを寇い，源の泉は自ら盗む』の文句を思いおこすと，いよいよつまらなくなった」のである。自分はまさに有用な山木や美味な源泉のようなものだ，山木や源泉のような有用は身を損なうのだ，無用であることこそ真に意味があるのだ，そう確信したのである。

このように，曹雪芹は『荘子』列禦寇篇と人間世篇とを連続して引用することで，世俗に暮らす宝玉が，心の中で常に「汎として不繋の舟の若く，虚にして遨遊する者（汎若不繋之舟，虚而敖遊者）」の世界に憧れていることを描き，宝玉の心境を描写しながら，「無用こそ有用」という宝玉の思いの丈を綴ったのである。曹雪芹は第二十二回のこの場面でも，『荘子』という書物が宝玉の生活の一部になっているということを描き，前掲拙稿「宝玉の「三大病」と荘子―『紅楼夢』第二十一回の脂評を基に」でみた脂評「すべて無意識のうちに順応し，心のままに動いている（随分触情）」[13] 宝玉像を浮き彫りにしている。

## 第二節　第二十二回の脂評が語る『荘子』の「無用の用」

前節でみたように，曹雪芹は第二十二回で『荘子』列禦寇篇と人間世篇を引用し，『荘子』の「無用の用」に救われ，真に人間らしい生き方を追求しようとする宝玉の姿を浮き彫りにした。これが小説全編に対する曹雪芹の意図であることを洞察した脂硯斎は，主要な登場人物六人を「無用の用」で分析し，以下のような鋭い指摘を残している。

> 黛玉は聡明すぎるせいで，宝玉は気にすることが多すぎて，一生不幸である。―気にすることは世の中のことではなくて，感情的なことである。感情が豊かすぎると悩みが増える。これもまた荘子的発想から

出てきたものである。もしかして私もまた彼らと同じように，「聡明」や「多情」のせいで身を誤るのだろう。笑われるよね！――阿鳳（王熙鳳）は機心のせいで，宝釵は博識の故に，湘雲は自尊心が高いために，襲人は勝気すぎて，みんな身を誤る。すべて荘子の言うとおりだ。なんとも悲しいことではないか！

黛玉一生是聡明所误，宝玉是多事所误――多事者，情之事也，非世事也；多情曰多事，亦宗庄笔而来。盖余亦偏矣，可笑！――阿凤是机心所误，宝钗是博知所误，湘云是自爱所误，袭人是好胜所误。皆不能跳出庄叟言外，悲亦甚矣！[14]

聡明な黛玉は，宝玉の最大の理解者である。宝玉への愛が許されない彼女にとって，二人の絆が強くなればなるほど，自分の感情を抑えつけなければならない。そのため，悩み苦しみが病弱の彼女をさらに攻め立てる。

周りの人に気を遣い過ぎる宝玉は，それが災いして気苦労が絶えない。最大の心配は黛玉のことなので，宝玉の感情は黛玉の一挙手一投足に振り回される。そして，黛玉の死が宝玉の人生に致命的な衝撃を与えただろう。それもこれも，宝玉の多感多情のせいである。

知謀に長ける王熙鳳は，知恵と謀略を働かせ，大家族の中で権力と地位を手に入れた。その知謀は他人を害してでも自らの利益を謀る道具となってしまい，周りの人から恨みを買うこととなる。そして，その知謀のために命を落とすことになる。

才能に恵まれた宝釵は，その知識と教養のために，社会や人間の暗黒部分を見抜いてしまう。しかし，男尊女卑の封建社会にあっては，彼女の博識はかえって彼女を苦しめる。まるで荘子のいう「知恵者はかえって心配性（智者忧）」（列禦寇篇）そのものである。

自尊心の強い湘雲は，自らの尊厳を重んずる。孤児の身で叔父に養われ，

愛情とは無縁な生い立ちが屈辱的で，そのために我が身を苦しめる。そして，遊女として売られる（であろう）ことで，彼女は人間としての尊厳さえ否定される。

勝気な侍女襲人は，人に認められるために勤勉かつ誠実に働く。常に宝玉の側室になるために発揮する彼女の勝気さは，結果的に他の侍女たちを排除し，ついには宝玉から疎んぜられることになる。

このように，脂評は六人全員の行く末[15]が「荘子の言うとおりだ（皆不能跳出庄叟言外）」と言い切るのだが，その荘子の言（庄叟言）とは，いうまでもなく第二十二回所引の『荘子』列禦寇篇と人間世篇をさす。とりわけ，ここでは人間世篇の一句「山の木は自らを寇い，源の泉は自ら盗む（山木自寇，源泉自盗）」を意識している。すなわち，「山木」や「源泉」のように高く評価されるべき性格や知恵の持ち主である六人は，それらが彼女たちの人生に幸福をもたらすどころか，逆に人生を狂わせ悲劇を招いた。脂硯斎は曹雪芹が引用した列禦寇篇と人間世篇の「無用の用」の意を受けて，俗世間では高く評価されるはずの長所が却って身を誤らせる原因となっていると指摘し，六人全員の生涯に「有用は無用」とする荘子の考え方が反映されていると指摘したのである。

さて，六人の中で王熙鳳に関しては，早くも第五回にその最期を暗示する詞がみえる。「賢きゆえに　謀略　過ぎて／かえって縮める　わが命（机关算尽太聡明，反算了卿卿性命）」[16]の一句がそれである。聡明すぎる王熙鳳は，自ら立てた謀略に策弄され，その謀略に溺れて命を失う。

実はこの詞にいう「机关」とは，策略・権謀・陰謀の意で，これはまさに本脂評のいう「機心」と同じ意である。なぜ脂評は「阿鳳（王熙鳳）は機心のせいで（阿凤是机心所误）」と評しているのかを調べてみると，その「機心」もまた『荘子』天地篇「機械ある者必ず機事あり。機事ある者は必ず機心あり。機心，胸中に存すれば，即ち純白備わらず。純白備わら

ざれば，即ち神生（性）定まらず。神生（性）定まらざる者は，道の載せざる所なり。（訓有機械者，必有機事。有機事者，必有機心。機心存於胸中，則純白不備。純白不備，則神生不定。神生不定者，道之所不載也）」[17]に由来する。

「機心」とは，計算，謀略，策略を使いこなす心である。胸中に「機心」のあるものは，本来もてる純真無垢を失う。純真無垢が失われると，人はその本性（自然）を乱す。本性が乱れると，天地自然から見放される。脂評が知恵と謀略を働かせる王熙鳳の特徴を『荘子』の「機心」を使って説明したのは，すでに第二回で，曹雪芹が「心機」[18]で王熙鳳を形容したのを受けてのことであろう[19]。

そもそも，「機心」は王熙鳳の評価されるべき長所でもある。しかし，「功利機巧は，必ず夫の人の心を忘う（功利機巧，必忘夫人之心」（天地篇）ともあるように，人は利益を目の前にすると，たとえ他人に害を及ぼそうとも，どのような手段を使ってでもそれを獲得しようとする。王熙鳳も例外ではない。その聡明さと胆力が謀略となり，本来あるはずの純白な心を失い，ついには身を誤らせる凶器となった。

脂硯斎があえて荘子のいう「機心」を用いて頭脳明晰な王熙鳳を表現するのは，曹雪芹が「有用は無用」という荘子の意を受けて彼女の運命を設定したのを熟知していたからであり，また，曹雪芹が王熙鳳に六人を代表させて全員の将来を暗示させたものと考えたからであろう。だから，本脂評は黛玉・宝玉・王熙鳳・宝釵・湘雲・襲人の主な登場人物を挙げ，彼らの人生はまさに『荘子』にいう「山の木は自らを寇い（山木自寇）」そのもの，いずれも「聡明」「多情」「机心」「博识」「自爱」「好胜」のために身を滅ぼした，まるで「すべて荘子の言うとおりだ（皆不能跳出庄叟言外）」と断じ，「なんとも悲しいことではないか！（悲亦甚矣！）」と嘆いた所以である。

ところで，本脂評は「有用」のために身を過った六人の登場人物を挙げたが，それに当てはまる人物は決して六人だけではない。曹雪芹は第五回で詩詞を創作し，そこに「有用」によって人生を狂わされる人物を描いている。今，脂評に挙げられた六人のほかに，人生が「有用」に身を誤らせる典型的な例として晴雯，香菱，元春，探春と李紈をみてみたい。

侍女晴雯は，「心ばえこそ　高けれど／下賤の身をば　いかにせん（心比天高，身为下贱）」[20]というように，身分は低いが気立ては良くて人格は高潔，それなのに「人の嫉みも　聡きゆえ／薄き命は　恨みゆえ（风流灵巧招人怨，寿夭多因毁谤生）」[21]とを詠まれ，その「有用」が故に人に嫉まれ中傷され，あげくに死に追いやられた（第七十八回）。

同じように，人さらいの手から薛蟠[22]の妾となった香菱は，「菱の実　蓮の実　香りはあれど／泥にまみれて　傷ましや（根并荷花一茎香，平生遭际实堪伤）」[23]というように，嫉妬心が一切なく，蓮華の如く清く正しく生きる女性であるが，誰とも争わない「有用」な品格があだとなり，薛蟠の本妻から妬まれ虐げられ，我が身を守ることもできずに「香魂かえる故郷へ（致使香魂返故乡）」[24]と，死から逃れ得ない結末を暗示している。

侍女や妾だけではない。宝玉の実姉，宮中に入って貴妃になった元春は，「栄華の夢も　束の間に／無常の風は　はや吹きぬ（喜荣华正好，恨无常又到）」[25]と，「有用」の才色を備えるため，皇帝の寵愛を受け，栄耀栄華を極めることができたとしても「命はかなく　消えてゆく（荡悠悠，芳魂消耗）」[26]と詠まれ，寵愛を失った挙句に命を落とす宿命となっている。もし彼女が才色兼備でなく「無用」であったなら，宮廷に選ばれることもなく，生まれ育った賈家でより幸せな人生を送れたであろう。

一方，探春（元春の実妹）は宮廷に入ることなく賈家で暮らしているが，「才たけ　意地はあるものを／末世に生まれし　身の不運（才自精明志自高，生于末世运偏消）」[27]と詠まれているように，才能もあり精神的にも強

かったが，「親きょうだいも　家も皆／遠く故郷に　うちすてて／余生の涙　辛くとも（把骨肉家园齐来抛闪，恐哭损残年）」[28]と，遠くに嫁いで家族と生き別れる不幸な結末を迎えるのである。不幸にも家運の傾いた賈家に生まれた探春にとって，持てる才能を発揮できない末世では「有能」であることがいかに虚しいかと，探春の人生を通して語りかける。

貴婦人の未亡人李紈を詠う詞「晩き春（晚韶华）」もまた，「有用」の虚しさを漂わせる。ひとり息子を立派に育て出世させた寡婦李紈は，「今や意気　揚々と／頭には　貴人の冠／光　燦々と／胸に　金印を懸け（气昂昂头戴簪缨，光灿灿胸悬金印）」[29]る光栄に浴したにもかかわらず，「死に近づくは　人の常（昏惨惨黄泉路近）」と，幸せな暮らしは長く続かず惨めに死んだと暗示し，残された「虚名を　人が仰ぐのみ（也只是虚名儿与后人钦敬）」[30]だと言い放ち，儒教道徳における美徳（節操）が悲劇的かつ皮肉な結末に導いたというのである。

晴雯，香菱，元春，探春と李紈によって暗示された人生は，人間世篇にみられるもうひとつの話[31]を想起させる。良質の木は，木材として伐採されて天寿を全うすることができない。荘子は，それは木材が優れて「有用」だからで，「有用」が招いた災いだと，自身の「有用」が害を招く源であることをすっぱ抜いた。荘子が提示した「有用」への懐疑的かつ否定的な意図を，曹雪芹は登場人物に反映し，それぞれの運命を悲劇的に描いた。換言すれば，曹雪芹は「無用の用」を用いて人物像を作り上げ，登場人物の運命を展開したのである。

以上のように，第二十二回の脂評から，曹雪芹が荘子の有用こそ無用の考え方を駆使し，六人の登場人物の結末にそれぞれの長所・利点の故に身を誤るという設定をしていたことがわかる。さらに，六人だけでなく，他の主人公たちも，自身の「有用」が何の役にも立たず，かえってその「有用」によって身を滅ぼす。脂評「すべて荘子の言うとおりだ（皆不能跳出庄叟

言外)」という「すべて（皆)」は，本脂評に挙げられた六人の人物だけでなく，第五回の詩詞に詠まれた多くの登場人物をも指している。すなわち，第二十二回所引『荘子』列禦寇篇と人間世篇の場面は，宝玉をはじめ，多くの登場人物の悲劇的な人生を描くためにはなくてはならないものであった。曹雪芹の真意を理解する脂硯斎が本脂評で言うのは，まさにこのことであろう。

## 第三節　『紅楼夢』に点在する「無用の用」

第二十二回に，曹雪芹は『荘子』の「無用の用」を語る列禦寇篇と人間世篇を直接引用した。それは物語の発展に合わせるために引用されたものではなく，宝玉の人生観や人物像を確立するために慎重に吟味されたもので，『紅楼夢』にとってなくてはならないものであった。また，脂評は，宝玉以外の登場人物五人もそれぞれの「有用」で身を誤り，悲惨な人生を送る結末は「すべて荘子の言うとおりだ（皆不能跳出庄叟言外)」と，曹雪芹の真意を代弁していた。

しかし，宝玉をはじめ登場人物の価値観からそれぞれの人生を描写するために「無用の用」の真の価値と「有用の用」への懐疑を反映させる場面は第二十二回に限らない。

拙稿[32]第三節「甲戌本と庚辰本の脂評から管見できる『荘子』」で言及したように，『紅楼夢』第一回では，架空の地名「大荒山」・「無稽崖」に掲げ，荘子の「荒唐無稽」の世界を彷彿とさせて作品の立意を明示した。その上で，曹雪芹は宝玉の前身を，女媧が天の破れを補填する際に棄てられた石ころと設定した[33]。この石ころは，「仲間の石たちがみな天を補うことができたのに自分だけ能なしで選にもれたため」[34]，昼も夜も悔しくて嘆いていた。ところが，年月を経て，役立たずだとして棄てられた「無用」の石だけが人間（宝玉）に生まれ変わることができた。このように，

曹雪芹は宝玉の生誕から「無用の用」を用いて物語を開始し，無用だからこそ生命を賦与されて人間に生まれ変わる機会が与えられたという設定で，宝玉の人生の物語を展開していくのである。

いうまでもなく，これは『荘子』人間世篇の「散木」の話[35]を下敷きにしている。神木として崇められる櫟の大木は，船にすると沈み，棺を作ると腐り，道具を作るとすぐ壊れ，門や戸にすると樹脂が流れ，柱にすると虫が湧いて使い物にならない。これは「散木」，すなわち無用木だからこそ，伐採されることはないから天寿を全うすることができる。同じように，曹雪芹は「不材」の石ころだからこそ命を宿した人間に生まれ変わることができたと，冒頭の宝玉生誕場面から「無用の用」を描いて宝玉の人物像を作り上げた。

それだけではない。宝玉の侍女晴雯が王夫人に追い出された後，宝玉は襲人に向かって「(晴雯は）器量が人より好くったって，それがなにも人のさまたげになるってものじゃあないだろう。……あの子は器量がよすぎたために，こんな側杖を食ってしまったんだよ！（虽生的比人强些，也没甚妨碍去处。……想是他过于生得好了，反被这好所误）」[36]と言った（第七十七回）ように，晴雯の有用な「器量」がかえって身を誤らせる凶器となっていることは，まさに第二十二回所引人間世篇「山木は自ら寇し，膏火は自ら煎く」を語っており，有用こそ身を損なうという荘子の考えを反映したものと考えられる。

また，ちょっとした話題にも，荘子の価値観を取りこんでいると読み取ることができる場面が散見する。例えば，第五十四回で，賈氏一族が賑やかに宴会を開いているときに，史氏[37]が皆を笑わせようとおどけ話をした場面である[38]。

ある家に十人の息子が十人の嫁を娶った。舅と姑は「利口者で，気も利くし口も達者」な十番目の嫁だけを可愛がる。他の九人の嫁は，その理由

を神様に聞いてみた。そこに孫悟空がやってきて言うよう，「おれの小便を飲んだからさ」と。この話を聞いた者はみな王熙鳳を見て笑い出し，口が達者でよく気が利く王熙鳳を「お猿さんのおしっこを飲んだ人（吃过猴儿尿的）」とからかった[39]。

まさか誰も孫悟空（猿）の排泄物を飲めば「利口者で，気も利くし口も達者」になるなど，思っていない。曹雪芹が史氏のおどけ話を描いて王熙鳳をからかうのは，史氏の歓心を買うために彼女が猿の尿を飲むほど屈辱的なことに甘んじだのだと皮肉って，上の顔色を窺い権力に媚びて地位を得ようとする俗世間の者に対する辛辣な諷刺にほかならない。

この痛烈な諷刺に遭遇した読者は，誰しも『荘子』列禦寇篇にある曹商の話を思い出さすだろう[40]。

秦王に気に入られご褒美をもらって帰国した曹商は，ばったり荘子に出くわした。己の活躍を自慢し，荘子の貧乏暮らしを馬鹿にする曹商に向かって荘子は言った。「秦王の腫れものをつぶした者には車一台，痔を舐めて治した者には車五台のご褒美。治す場所は下になればなるほど，ご褒美が増えるとか。君も秦王の痔を舐めたかい？それにしても大したご褒美だなあ」と。

現実社会では，曹商のように富と地位を手に入れた者は勝者として賞賛される。しかし，彼らは時に人としての誇りも葬り去り，ただ権力に媚びて成り上がる。逆に，荘子のように社会の底辺で徘徊する者は敗者として蔑視される。しかし，「敗者」は決して上の者に媚びを売ることもなければ，地位も名誉も富も無縁であるが故に，どこまでも自らの意志で自由に生きている。「勝者」とは，その実は権力にこびへつらい，自らの人格まで捨てる賤しい計らいの結果でしかないと，荘子は残酷な事実を突きつけた。

荘子のこの諧謔もまた，「無用の用」の延長線上にあると考えてよい。

なぜなら，王熙鳳も曹商も勝者となったのはその「有用」のためだが，曹雪芹は，現実社会では「有用」な人間の面構えは実に醜いという現実をさらけ出し，読者を笑わせながら，本当にそれが幸せな人生なのだろうか，否，現実社会からはじき出される「無用」者にこそ，荘子のように自由な，そして人間らしい人生ではないかと，「有用」の勝者と「無用」の敗者の価値をひっくり返したのである。

以上のように，第二十二回以外にも，「無用の用」を想起させる場面は『紅楼夢』全編に散見する。無用の石ころだからこそ生命を賦与された宝玉は，役立たずであること，「無用」であることをひたすら求めて自由に生きようとする。逆に，「有用」にそこなわれ不幸を招くという荘子の考え方が，晴雯のような登場人物の人生に色濃く映し出されている。さらに，王熙鳳に代表される「有用」者は，その「有用」が足かせとなり，自らを束縛して悲劇的な人生となることを予感させる。曹雪芹は世の勝者（有用）とは，実は己の価値を誇示したがる精神的に幼稚で卑賤な者，主体性のない者の代名詞だと嘲笑しながら，「有用」への懐疑を綴り「無用の用」を謳歌している。

## 第四節　「無用の用」による価値観の崩壊

では，『紅楼夢』全編にとって「無用の用」はいかなる意味を持つのだろうか。曹雪芹が「無用の用」を全編に描いたのは，ただ「無用の用」を謳歌するためではなく，二つの批判の意を読者に提示するためであった。

ひとつは，本稿第二節で言及した王熙鳳の「機心」から，曹雪芹の人間の飽くなき欲望に対する批判を読み取ることができる。

人は誰しも知恵を得たい，高い地位につきたい，富を築きたい，成功したいという欲望がある。その欲望はそもそも悪ではなく，むしろ健全な精神の証であり，だからこそ文明の発展や社会の進歩の原動力ともなりうる。

しかし，欲望を満たすために，人は時として邪悪な誘惑に負け，目的のためであれば手段を選ばなくてよい，何をしても許されるという錯覚に陥る。そして，「機心」――自然の働きを阻害する人為的な作為に支配され，果たして他者を不幸に陥れることになる。

「機心」に翻弄されて人生を狂わせた王熙鳳や襲人のように，自らの欲望に駆られて「機心」をもてあそぶ者は，人に危害や損失を及ぼすだけでなく，それが必ず自分に跳ね返ってくる。荘子が，「機心，胸中に存すれば，即ち純白備わらず（機心存於胸中，則純白不備）」といったように，人は自らの欲望を満たすために打算や遠謀を働かせると，人間本来の美しい心を失い，ついには身を滅ぼすこととなる。曹雪芹は作為的な「機心」を捨てよという荘子の考え方を王熙鳳や襲人に具現化し，人間の欲望がいかに危ういか，自らの欲望のために働かせたはずの「機心」は，実は自らこうむる禍の種を蒔いていることを描き出した。

今ひとつ読み取るべきは，曹雪芹が「無用の用」を手放しで肯定しているのではなく，「無用の用」を説くことで人間社会の矛盾を暴き出していることである。

『荘子』山木篇の冒頭に，役立たずの樹は伐採を免れ，その天寿を全うすることができるのに，鳴かずに使いものにならない一羽の鵞鳥は殺されてご馳走に供されるというエピソードがみえる[41]。「無用」の木は寿命を全うすることができるのに，同じ「無用」の鵞鳥は殺される。共に「無用」でありながら，一方は生き延び，一方は殺されるという矛盾。この矛盾をどのように解決するのか。荘子は有用と無用の真ん中に身をおくことがよりよい方法であると言いながら，それにもかかわらず「故に未だ累を免れず（故未免乎累）」と戸惑いを隠さない[42]。荘子の戸惑いに共感しているのは宝玉である。だから，列禦寇篇を思い出し，「巧者」・「知者」になれば苦労するだけであろうかと困惑したのである。

さらに，「山木篇」には，この世の万物のあり様と人間社会のうつりゆきは，有用なものも，無用なものも，いずれその理由によって自ら災いを招くのである。付いては離れ，完成すれば壊れ，角立っては砕け，高くなると傾き，成功すれば害に遭い，賢者は謀略にかかり，愚者は馬鹿にされる。これが現実である。この現実に対し，荘子も「悲しいかな」と嘆くほかなかった。有用なものが身を損なうのが必定ではなく，無用もまた捨てられ欺かれるとは，なんと理不尽な世界であろうか，と[43]。荘子は現実社会の矛盾を赤裸々に露呈し，辛辣に批判している。

このように，荘子は無用こそ有用であると言いながら，それが決して万全ではないとも指摘している。荘子の言葉通り，現実社会では有用のものが必ずしも活かされず，むしろ有用であれば損なわれ，同時に，無用になると無能者扱いされ，無用のレッテルを貼り付けられ，無視される。あらゆるものはそれぞれに絶対的な価値があるとする荘子にとって，本来の自然の働きを発揮できず，価値観が混乱し，是非を転倒し，黒白を混同する現実社会は受け入れがたいものであった。現実社会は，社会のあり方（万物の情）も人間の価値観の変容（人倫の伝）も不健全である。とは言え，その現実社会で生きていかざるを得ない荘子は，「無用の用」を訴えながら，現実との狭間で無力感に苛まれる。荘子は人間の知恵や欲望を一方的に責めるのではなく，価値あるもの，知恵ある人がなぜ現実社会で恵まれないのかと現実社会批判を吐露しつつ，そもそも何者かの都合によって決めつけられている価相――相対的価値観が間違っているのではないかと問いかけている。

荘子が現実を見極めた上で，社会の深刻な問題を提起したと同じように，曹雪芹は『紅楼夢』の登場人物を通し，不健全な社会がもたらしたもの――人間一人ひとりの悲劇を包み隠すことなく赤裸々に描写した。健全な社会であれば，人は良い面が伸ばされ，悪い面が改善されて良い方に変え

られるはずである。しかし，現実はまったくその逆，悪い面がどんどん膨れ上がり，良いものがいつの間にか消滅してしまう。『紅楼夢』の登場人物，少なくとも第二十二回脂評に挙げられた六人は，すべて現実社会の犠牲者として描かれている。黛玉と宝玉は互いの愛を成就できず悩み苦しみ，湘雲と宝釵は男尊女卑の封建社会にあって優れた才能を発揮できず，王熙鳳と襲人は聡明な頭脳を生かし切れずに己の見栄と欲望に負け，いずれも報われない最後となる。

曹雪芹は，荘子の「無用の用」に共感しながら，「有用」も「無用」も結局は報われない理不尽な社会に生きる人々の人生を記録し，深い絶望感を吐露しつつ，そのような社会に対する批判を綴ったのである。これこそ，荘子の「無用の用」を全編に取り込む真の意味であろう。

## お わ り に

『紅楼夢』における「無用の用」は，第二十二回に『荘子』列禦寇篇及び人間世篇を引用することによって顕著に反映されている。のみならず，脂硯斎は，曹雪芹の描く人物がまさに荘子のいう不幸な人生――不健全な社会で絶対的な価値が認められず，生かされないために結果的に身を誤った人生を読み取り，荘子の嘆き「悲しいかな（悲夫）」[44]に共感し，「なんとも悲しいことではないか（悲亦甚矣！）」と嘆いたのである。曹雪芹が「無用の用」を用いて宝玉の人物像を作り上げたこと，全編に登場する人物の運命を「無用の用」によって設定した上で物語を展開させ，当時の儒家的価値観を破ろうとしたのである。すなわち，曹雪芹は『紅楼夢』全編に「無用の用」の価値観を散りばめて，従来の価値観を崩壊させようとしたのであり，これが脂評のいう「すべては荘子の言うとおりだ（皆不能跳出庄叟言外）」ということになるだろう。

もちろん，『荘子』は戦国時代に生きる人間の考え方や生き方を反映す

るものであるから，曹雪芹が生きた清朝にそのまま当てはめることはできない。また，『荘子』は人間の弱点や「常識」の中の非常識を痛烈に批判する寓話であって[45]，小説『紅楼夢』と同列に論ずることはできない。しかし，『紅楼夢』は小説の形式をとりながら，当時の儒教的封建社会に生きる人間の苦悩を赤裸々に描き出し，儒教的価値観へのアンチテーゼ，「常識」への懐疑を読者に訴えている。両者は時代も社会背景も文章形式も大きく異にするが，私たちに訴えかける内容は，すべて今現在のこの現実世界のことでもある。

## 注

1）拙稿「『紅楼夢』の思想的研究序論」（桃山学院大学総合研究所『国際文化論集』第47号2013年３月）参照。

2）脂評とは，脂硯斎が曹雪芹の『紅楼夢』創作と寄り添いながら，写本に記した評論である。脂評の研究の一方で，当然のことながら，脂硯斎とはどういう人物であろうかという問題も持ち上がった。脂硯斎に関しては今も多くの謎が残ったままである。諸説あるが，曹雪芹の知己とするのが筆者の考えである。拙稿「『紅楼夢』研究における脂評の位置づけ――甲戌本と庚辰本にみえる脂評を中心に」（大阪大学中国学会『中国研究集刊』第57号2013年12月）参照。

3）前掲拙稿「『紅楼夢』の思想的研究序論」，前掲拙稿「『紅楼夢』研究における脂評の位置づけ――甲戌本と庚辰本にみえる脂評を中心に」，拙稿「宝玉の「三大病」と荘子――『紅楼夢』第二十一回の脂評を基に」（桃山学院大学総合研究所『人間文化研究』第２号，2015年３月），拙稿「『紅楼夢』第二十一回『荘子』胠篋篇続作の意味するもの」（桃山学院大学総合研究所『人間文化研究』第３号，2015年10月）参照。

4）飯塚朗訳『紅楼夢』Ⅰp.242（集英社，1980年）。本稿では『紅楼夢』の日本語訳はこれを用いる。なお，脂評は日本語訳がないので筆者自らの訳である。

5）《红楼梦》上 p.294（人民文学出版社，2008年）。本稿では『紅楼夢』の原

文はこれを用いる。原文引用にあたり，すべて底本の字体に従い簡体字とした。これは1953年初版，1957年校注，1959年校注第二版，1964年校注第三版まで繁体字であったが，1974年第四版から簡体字になった。そして，1982年には紅学界の泰斗が集結して校注を増補し第五版を完成させた。本稿で用いる2008年版は，1994年と2007年に最新の研究成果を取り込んで1982年版を全面的に修正・校訂したものである。

6）金谷治訳注『荘子』第四冊（岩波書店，2006年）p.170。本稿の『荘子』原文と訓読はこれによる。

『荘子』列禦寇篇に，「巧者は労して知者は憂うるも，無能者は求むる所なく，食らいて遨遊す。汎として不繋の舟の若く，虚にして遨遊する者なりと（巧者勞而知者憂，无能者無所求，食而敖遊，汎若不繫之舟，虛而敖遊者也）」とあり，金谷氏は「飽食而敖遊」五文字の「飽」を，「世徳本」および「釈文」に従って省いている。

7）『紅楼夢』第五回に，「那宝玉也在孩提之间，况他天性所禀，一片愚拙偏僻，视姊妹兄弟皆出一意，并无亲疏远近之别」と，宝玉の「愚」「拙」という「偏屈な性格（偏僻）」が指摘されている。これまた，曹雪芹が『荘子』の「巧者」「知者」に対置するものとして，宝玉に賦与したものと考える。

8）注７参照。なお，「知者」に対する「愚者」は，「以不平平，其平也不平，以不徵徵，其徵也不徵，明者唯爲之使，神者徵之，夫明之不勝神也久矣，而愚者恃其所見入於人，其功外也，不亦悲乎」（列禦寇篇）など，『荘子』中に散見する。

9）例えば，『紅楼夢』第三回で詠まれた詞に，「无故寻愁觅恨，有时似傻如狂。……潦倒不通事务，愚顽怕读文章」とあり，宝玉を「狂」・「愚」と形容している（《红楼梦》上 p.49）。前掲拙稿「宝玉の『三大病』と荘子」の第一節「第一の大病」参照。

10）この点に関して，伊藤訳は「原文『山木自寇，源泉自盗』であるが，『人間世』に見えるのは『山木自寇也，膏火自煎也』。あるいは『源泉』の句は作者がほかから持ってきたのではないかと思われるが，後考を俟つ」（伊藤漱平訳『紅楼夢』上（平凡社，1994年）p.299）と注するのみで，『荘子』山木篇への言及が全くない。井波訳は「源泉自盗」について，「『直木は先ず伐られ，甘井は先ず竭く』という句の後半を踏まえた表現と思われる」（井波

陵一訳『新訳紅楼夢』二（岩波書店，2013～2014年）p.111）と注するものの，氏もまた脂評には言及しない。

11）『莊子』第一冊 p.144～145。

12）鄧遂夫校訂《脂砚斋重评石头记庚辰校本》第二卷（作家出版社，2006年）p.363。本稿の脂評原文はこれを用いる。

13）同上 p.364

14）同上 p.364

15）六人の登場人物の結末は以上のように予測できるが，「身を誤る（所误）」結末は八十回中に描かれていないので，どのように「莊子のいうとおり（不能跳出庄叟言外）」であるのかは謎のままである。

16）《红楼梦》上 p.85

17）『莊子』第二冊 p.122

18）冷子興が王熙鳳のことを評した「说模样又极标致，言谈又爽利，心机又极深细，竟是个男人万不及一的。」（《红楼梦》上 p.33）に「心機」とある。

19）「心机」（第二回），「机关」（第五回），「机心」（脂評）はすべて同じ意味を持つ語彙と考える。

20）『紅楼夢』Ⅰp.61

21）同上 p.61

22）薛宝釵の実兄であるが，無学で無頼の徒と付き合う不肖の輩である。

23）『紅楼夢』Ⅰp.61

24）同上 p.61

25）同上 p.68

26）同上 p.68

27）同上 p.62

28）同上 p.68

29）同上 p.72

30）同上 p.72

31）宋有荊氏者，宜楸，柏，桑，其拱把而上者，求狙猴之杙者斬之，三圍四圍，求高名之麗者斬之，七圍八圍，貴人富商之家，求樿傍者斬之，故未終其天年，而中道已夭於斧斤，此材之患也。（『莊子』第一冊 p.140）

32）前掲拙稿「『紅楼夢』研究における脂評の位置づけ――甲戌本と庚辰本に

みえる脂評を中心に」

33）原来女娲氏炼石补天之时，于大荒山无稽崖炼成高经十二丈，方经二十四丈，顽石三万六千五百零一块。娲皇氏只用了三万六千五百块，只单单的剩了一块未用，便弃在此山青埂峰下。（《红楼梦》上 p.2）

34）『紅楼夢』Ⅰp.12

35）匠石之齊，至乎曲轅，見櫟社樹，其大蔽數千牛，絜之百圍，其高臨山，十仞而後有枝，其可以爲舟者，旁十數，觀者如市，匠伯不顧，遂行不輟，弟子厭觀之，走及匠石曰，自吾執斧斤以隨夫子，未嘗見材如此其美也，先生不肯視，行不輟，何邪，曰，已矣，勿言之矣，散木也，以爲舟則沈，以爲棺槨則速腐，以爲器則速毀，以爲門戶則液樠，以爲柱則蠹，是不材之木也，无所可用，故能若是之壽。（『莊子』第一冊 p.134）

36）『紅楼夢』Ⅱp.505

37）宝玉を溺愛する祖母で，賈氏一族に君臨する。

38）那日你们妯娌十个托生时，可巧我到阎王那里去的，因为撒了泡尿在地下，你那小婶子便吃了。你们如今要伶俐嘴乖，有的是尿，再撒泡你们吃了就是了。（《红楼梦》上 p.743）

39）『紅楼夢』Ⅱp.188

40）宋人有曹商者，爲宋王使秦，其往也，得車數乘，王悅之，益車百乘，反於宋，見莊子曰，夫處窮閭阨巷，困窘織屨，槁項黃馘者，商之所短也，一悟萬乘之主，而從車百乘者，商之所長也，莊子曰，秦王有病，召醫，破癰潰痤者，得車一乘，舐痔者，得車五乘，所治愈下，得車愈多，子豈治其痔邪，何得車之多也，子行矣。（『莊子』第四冊 p.179）

41）莊子行於山中，見大木，枝葉盛茂，伐木者，止其旁而不取也，問其故，曰，无所可用，莊子曰，此木以不材得終其天年矣，出於山，舍於故人之家，故人喜，命豎子殺雁而亨之，豎子請曰，其一能鳴，其一不能鳴，請奚殺，主人曰，殺不能鳴者。（『莊子』第三冊 p.69）

42）周將處乎材與不材之間，材與不材之間，似之而非也，故未免乎累。（『莊子』第三冊 p.71）

43）若夫萬物之情人倫之傳，則不然，合則離，成則毀，廉則挫，尊則議，有為則虧，賢則謀，不肖則欺，胡可得而必乎哉，悲夫。（『莊子』第三冊 p.71）

なお，金谷氏は「尊則議，有為則虧」を「尊則虧，有為則議」と改め，「諸

本ともに「虧」と「議」の二字が入れ代わっている。王叔岷は『呂氏春秋』と『淮南子』説林篇に拠って二字を交換した。今，それに従う。」と注するが，筆者は劉文典≪莊子補正≫（雲南大学出版社・安徽大学出版社，1999年）の説（鄭箋云：俄，傾貌。「尊則俄」，謂崇高必傾側也。古書「俄」字或以「義」為之，説見王氏経義述聞尚書立政篇，亦或以「議」為之。）により原文を是とする。

44）注43参照。

45）難解なことばも多いが，奇想天外な比喩や寓話を織りまぜたのびのびした文章は，特殊な魅力をもって読者をひきつけずにはおかない。その思想は現実社会のわくをこえ出た外界のひろがりから人生を考えるものであったから，そこにおのずから浪漫的でとらわれのない自由な精神的境地が開けていたが，文章表現そのものもまたそうした内容に適合したものであった。（『莊子』第一冊「解説」）

# 『紅楼夢』における「無用の用」

## ――第二十二回所引『荘子』列禦寇篇及び人間世篇を中心に――

王　　竹

要　旨

『紅楼夢』第二十二回には『荘子』列禦寇篇と人間世篇を引用したくだりがあり，それらを分析すると，主人公宝玉の「無用こそ有用」であるという考え方を明らかにすることができる。『紅楼夢』の引く人間世篇のすぐ下にある脂評を見ると，人知はその身に害をもたらし，無用であれば自由自在に生きて天寿を全うすることができるという，いわゆる「無用の用」をいう作者の意図が明らかである。

第二十二回の脂評では，『紅楼夢』の六人の登場人物を挙げ，常識では高く評価されるべき各人の長所が，逆にそれぞれ身を誤る原因となっていると指摘している。さらに，本脂評に挙げられた六人のほかにも，自身の「有用」によって人生が狂わされる多くの登場人物がおり，それらを分析することによって，まさに脂評にいう「すべては荘子に言い当てられた（皆不能跳出庄叟言外）」を照査することができる。これは「無用の用」の裏返しであるが，有用は不幸を招くという荘子の考え方が，登場人物の人生に色濃く映し出されており，曹雪芹の描く人物像は『荘子』の思想を具現化したものであるといえよう。

実はこの「無用の用」の思想は，『紅楼夢』全編にわたって描かれている。『紅楼夢』は第一回の冒頭から，無用の石が人間になる機会を与えられたという設定で宝玉の人生の物語を展開していくのである。第七十七回では，宝玉に晴雯の命運を「山木は自ら寇し，膏火は自ら煎く」（人間世篇）と評させることによって，作者は「無用の用」を反映させたに違いない。さらに，第五十四回にみえる孫悟空の尿を飲んだ嫁が口達者になった

という辛辣な冗談も，読者は容易に『荘子』列禦寇篇の曹商の話を想記し曹雪芹が読者の笑いを誘いながら，権力に媚びて成り上がった者を嘲笑していることを知るのである。

しかしながら，曹雪芹が「無用の用」を全編に描いたのは，ただ「無用の用」を謳歌するためではない。現実社会では有用なものが身を損ない，無用もまた切り捨てられ欺かれる，なんと理不尽であろうかと，荘子の「無用の用」に共感しながら，「有用」も「無用」も結局は報われない理不尽な社会に生きる人々の人生を記録し，深い絶望感を吐露しつつ，そのような社会に対する批判を綴ったのである。これこそ，曹雪芹が全編に「無用の用」を取り込んだ真の意味であろう。

# Use of Uselessness in *the Dream of the Red Chamber* – *Lieyukou-pian* and *Renjianshi-pian* Section of *"Zhuangzi"*, Chapter 22

WANG Zhu

In Chapter 22 of *the Dream of the Red Chamber*, by analizing the quoted *Lieyukou-pian* and *Renjianshi-pian* section of *Zhuangzi*, we can find the hero Jia Bao-yu holds the idea of "useless is useful". The assessment of the quoted section of *Zhuangzi* here shows clearly that "useful" can sometimes cause harm to us while "useless" can bring us freedom and health.

In the assessment of this chapter, it gives the example of six persons of this novel with very useful ability who should be usually respective, all are driven insane by their advantages. Besides the six person listed, there are many other similar examples which make us know the fact that useless is sometimes useful, and useful is sometimes useless. The writer of this novel shares the idea with *Zhuangzi*.

The idea of "the use of uselessness" can also been seen in many other parts of the novel. In Chapter 1, the novel begins with a useless stone which is given the chance of becoming the hero of Baoyu, meaning a precious stone. In chapter 77, Baoyu says the fate of Qinwen is like this: good strong trees are usually cut for use and easily burning material is always firstly used for burning. This also shows the idea that being useful can sometimes be harmful.

No matter how the writer shows the facts of "the use of uselessness" here and there in the novel, he does not mean to praise "uselessness". "Useful can sometimes be useless" is another fact that exists the same time with "useless can sometimes be useful", we should learn from the despairing fact of the unjust society at that time and live with a balanced use of uselessness.